

『都名所図会』にみられる文化表象としてのインフォグラフィックスに関する考察

胡 博寧

はじめに

江戸時代には各藩の大名を領地から江戸に出仕させる参勤交代の制度が実施されたことに伴い、各地において道路や橋、宿場などの施設が多く建設・整備された。また社会と経済の安定化によって、大名のような上流階層だけではなく、一般庶民の間にも長距離の旅行は可能になった。「伊勢参宮」に代表される寺社参詣を目的とした宗教・信仰の旅から始まって、このことを口実あるいは建前にした名所めぐりや物見遊山を目的とした娯楽の旅も次第に盛んになり、やがて大衆の間では旅行のブームが起こった¹。この社会背景のもとで、旅行者たちに各地の名所旧跡や風俗を紹介するための名所案内記・地誌本類の書物が次々に編纂・出版され、その中では『都名所図会』をはじめとした名所図会というジャンルがあった。

近世の名所案内記の先駆けとして、文芸的・物語的な叙述と補足的な挿絵を用いた名所記などの刊行物と比べて、名所図会においては物事の由来や道中の行程が客観的に記述されたほかに、地方の名所や風物を写実的に描写した図絵も大量に掲載された²。また、これらの図絵は芸術性と鑑賞性に重きを置いた風景画・風俗画とも異なり、寺社の全貌・配置や行事の場面・見どころなどに関する情報を読み手に把握させるために描かれていて、案内としての説明機能を果たしている。つまり、各名所・名物のありさまや特色を絵画の形式で客観的に表現した名所図会の図絵は、情報を視覚的な手段でわかりやすく伝えるためのインフォグラフィックスの一種として捉えることが可能である。

名所図会に対する先行研究は、その内容の本文、図絵、詩歌または作者・絵師自身やシリーズの系譜などを研究対象として、歴史学、環境学、国文学など様々な分野領域にわたって行われてきた。とりわけ各名所の成立と描写からみた当時の名所観や社会、生活、環境の様相についての研究成果は多く蓄積された³。そして本研究では、上述した名所図会を過去の物事を知るための資料として使った研究に対して、名所図会の名所案内記いわゆる観光のガイドブックとしての性格に立ち戻り、視覚的な図画を通して諸名所にまつわる情報を伝達するインフォグラフィックスの視点から、シリーズの嚆矢でありかつ代表作の一つである『都名所図会』に掲載された様々な図絵とその表現を対象にして分析

研究を行う。

具体的な研究方法については、まず『都名所図会』の図絵を描写の内容によって分類し、それぞれの絵画表現（異なる高さの視点の使い、構成要素の配置、表象対象の選択等）とその中に含まれた情報を分析してから、各類別の名所・名物を表象するときの傾向と手法の特徴を代表的な作品と対照しながら検討する。そしてその結果をふまえて、『都名所図会』掲載の図絵にみられる視覚化された情報伝達の技巧と工夫をまとめて、本書のインフォグラフィックスとしての有効性を検証する。また、作者がこれらの図絵の表現を通して当時の旅行者たちに伝えたかった京都の文化的イメージを考察することをも本研究の目的とする。

第1章 インフォグラフィックスとしての『都名所図会』

第1節 絵による京都名所の観光案内

『都名所図会』は安永9年（1780年）に京都の出版書肆の吉野屋為八のもとで、読本作者・俳人の秋里籬島（本文解説と編纂担当）と浮世絵師の竹原春朝斎（図絵担当）によって創作、刊行された京都の名所旧跡などを紹介する案内書である。本書は発売されてから足掛け二年の期間で、その売上が当時の常識の数とみられた500部（初版）を大きく超えて4000部に達し、高い人気を持つベストセラーとなっていた⁴。

文章記述と挿絵を併用する近世の名所案内記として、名所図会シリーズに先立って名所記と呼ばれる作品群があった。その先駆けとされるのは、明暦4年（1658年）に刊行された中川喜雲著の『京童』である。同じく京都名所の案内書として『京童』が『都名所図会』の成立に多大な影響を与えたとみられるが⁵、両者の編纂と表現上の工夫にはやはり多くの異同がある。例えば賢い少年の案内による主人公の京都見物をめぐる物語という設定の『京童』と比較して、『都名所図会』の本文解説では前者にみられる伝統的な名所観（古歌、古典、俳諧等との関わり）が表されるほかに、場所・施設・事象の現状や地理的位置など当時の各名所の実態に関する記述もよく整理されている⁶。そして図絵の表現については、『京童』に収録された挿絵は本文の内容と合わせて、それぞれの名所の雰囲気や情景を浮かび上がらせるために描かれた近景の「物語の一つのシーン」のようなものとして、名所自体に対する全体的かつ写実的な描写が欠けている⁷。一方で、『都名所図会』に掲載された図絵の多数は寺社などの全体像を上空からの視点で表現する鳥瞰図であり、建物の細部や透視図法、各構成要素のスケールと位置関係がより正確に描かれ、統一されている。そのほかにも、低く近い視点で行事や人たちの生業の場面とそ

の特徴的な部分を細かく描写した作品が多くある。つまり『都名所図会』はその本文記述と図絵表現の写実性・客観性をもって観光案内書としての充実さと実用性が認められたと考えてもよいだろう。これも当時において本書が広範な好評を博した人気作となったことにつながると推測される。

上述したように、『都名所図会』は旅行者が実際に本書を参照しながら京都の名所めぐりをすることを想定して創作されたものである。そのためには、本文の解説以外に各名所に関わる様々な情報（場所・施設の空間構成や事象の具体的内容等）を使い手に効率的に伝達する図絵が大量に用いられた。この特性を「情報をわかりやすく、人に伝わるかたちに視覚化したもの」⁸というインフォグラフィックスの定義と対照して見れば、絵画表現の物語性の高い『京童』の挿絵と比べて、情報提供性・説明性が強調される本書の図絵はインフォグラフィックスの一つの形式と位置づけられることもできよう。そしてそれぞれ異なる視覚表現とそれによって伝えられた情報を通して、対象の名所である物事のあり方や特質を考察するのが可能になる。

第2節 図絵の総覧と分類

本稿では『都名所図会』にみられるインフォグラフィックスの工夫を分析するのに先立って、その掲載図絵の分類を行う。

まず、図絵の内容、言い換えれば視覚で伝達された情報の全体像を寺社（宗教的な場所）、自然（山岳や河川）、行事（祭礼、芸能、遊興等）、産業（人の生業や特産品）、集落（村落、市街などの広域空間）、歴史（故事・伝承や古跡）、施設（橋梁、住居など、主に寺社以外の機能的施設を指す）の七つに分ける。次に、長谷川奨悟が名所の空間構造を分析するために用いた人物像による空間指標⁹を参考にして、図絵の描かれた視点を超遠景（視点がより高い位置にあり、人物像が点や線で表現されて考察しにくいもの）、遠景（視点が超遠景より少し低く、人物像が小さいがある程度考察できるもの）と近景（視点が二、三メートルの高さの低い上空に位置し、人物像の表情や衣装の図柄まで読み取れるもの）の三つに区分する。以上の分類基準にしたがって、『都名所図会』の全 232 点の図絵作品（複数の枚数があっても、絵画表現には連続性があるものは一つの作品とされる）を整理して表 1 にまとめた。

結果から見ると、本書の中で最も多く描写された図絵内容は寺社（計 146 点、全体の約 63%）だということがわかる。この点から、多数の有名な神社仏閣の名所を持つ京都の宗教都

市としての性格が伺える。寺社に次いで多くみられるのは行事（計 25 点、約 11%）である。なお、行事の内訳をさらに分類したところ、25 点中 16 点が宗教的な祭礼や儀式であったため、描かれた行事図絵の数においても寺社の多さからの影響が示されている。一方で図絵視点については、高い上空から俯瞰した超遠景と遠景の構図（両者合計 184 点、全体の約 79%）は、上空の低い位置に視点を置いた近景（計 48 点、約 21%）より圧倒的に多いことが明らかになった。ほとんど近景での挿絵を用いた『京童』と対比して、『都名所図会』の図絵表現は異なる方向性を見せた。具体的には、超遠景と遠景の構図が主に寺社と集落の図絵にみられ、このような特定の場所・空間の実態を全体的に捉える地理的説明性の強い作品は、本書図絵部分の主要構成要素であると言えよう。そして近景描写の多くは行事や産業などの「人の営み」に集中され、近世風俗画の影響を受けているとも思われる¹⁰。

以上は『都名所図会』掲載図絵の総覧とされる。次章では各種の内容の分類に沿って、それぞれのインフォグラフィックス表現への分析を展開する。

第2章 図絵表現の分析

第1節 寺社

上記で述べたように、いろいろな神社仏閣は『都名所図会』の中で最も多く描かれた対象である。寺社のインフォグラフィックス表現の代表的な手法として、超遠景や遠景の視点から捉えた境内全体の鳥瞰図がよく用いられた。そして画面の構図を分解して見ると、一つの寺社図絵が前景、中景と背景（後景とも言う）の三つの要素によって構成されるのは一般的な表現形式だということが確認できた。

まず前景のほとんどは、画面の下部に描かれている寺社門前の通路である。これは該当項目の本文冒頭によくみられる名所の位置に関する記述（例えば建仁寺項の記述「東山建仁禅寺は大和大路四條の南にあり」¹¹）と対応していると思われる。つまり、それぞれの門前通りの一部を描いたこの前景描写は、各寺社と付近の主要道路との位置関係およびその入り口の所在に関する地理的情報を視覚的に提示する役割を發揮していた。また、道を往来する人たちなどの表現によって、道路の性格も可視化された。例としては、数多くの旅行者、人足、貨物運送用の牛馬で賑わう京都と伏見・宇治をつなぐ大和大路（巻三「蓮華王院三十三間堂・大佛殿」）や、愛宕参りに使われる「皿竹輿」が二台みられる愛宕参道（巻四「清凉寺」）の絵画表現が挙げられる。次に中景となるのは、主に画面の

中部に置かれた寺社自体の境内である。各主要堂宇・建造物とその配置の描写は、作品を画面で空間構成を把握させるためのインフォグラフィックス（地図）として成り立たせた。ことに巻三の「比叡山延暦寺」や巻六の「鞍馬寺」

（図 1）などの山寺（社）図絵においては、麓からの登山ルートと山内の通り道が描かれているゆえに、ハイキングコースの案内としての実用性が認められた。最後に画面の上部にある背景の描写は二つのパターンに分けられる。一つは市中の民家などの屋根であり、そしてもう一つは山体や林木などの自然的要素である。それぞれに表象された対象を通して、寺社の周辺環境に関わる情報を捉えることができる。

場所の空間把握がこれらの寺社図絵の主な目的であるのは既に述べたとおりだが、各自の個性あるいは独特さを表して発信するためには、基本の宗教建築のほかに様々な名木や名水（井戸）、古跡、宝物などの「見どころ」のようなものがしばしば描かれている。その中では三十三間堂の通し矢（巻三「蓮華王院三十三間堂・大佛殿」）と西洞院の黒染（巻二「菅大臣社」）が代表する行事や産業を内容とする描写もいくつかみられる。しかし寺社の全体像を視覚的につかませるといふ主要目的が存在する以上、上述した各種の特徴的な物事はあくまでも一つのサブ要素として成立して描かれた。ゆえにその絵画表現も小さく簡略化されている。

以上で分析した超遠景・遠景視点の作品以外に、『都名所図会』の寺社図絵の中にはごく稀に近景で描いたものも 3 点（全体の約 2%）ある。一つ目は巻一の「御所八幡社」（図 2）である。絵にはこの神社の鳥瞰図ではなく、雨の中で人々が傘を差して道を急ぐか社門で雨宿りをする場面が描写されている。画面の左上に書かれた宝井其角の俳句「夕立ちや 法華かけ込む 阿弥陀堂」（大雨が急に降ってきたら、法華宗の僧侶でも宗旨の違う浄土宗の阿弥陀堂に駆け込んで雨宿りをするというのは句の大意）と当時の社内にも阿弥陀堂があったこと¹²を参照すれば、この絵画表現は上記の其角の句を連想させるためのものであると推測され、また『京童』の挿絵にみられる名所にまつわる文芸的イメージの視覚伝達の手法につながっていると指摘できよう。そして二つ目の「野々宮」と三つ目の「下鳥羽戀塚寺」（両方とも巻四にある）は一つ目の作品と比べて俯瞰的な視線で境内全体が描かれているが、建造物の材質や人物の表情まで読み取れる近景での描写が採用された理由について、その表現対象となる場所の狭さを伝えるためであると考えられる。つまりこの二つの作品のインフォグラフィックス表現は、本書凡例の第 3 項に書かれた人物像と空間

との関係に関する記述「故に圖毎に人物あり形容至って微少なる人物は其地廣大としるべし形容微少ならざるは境地狭少なり」¹³を直接的に体现していると言ってもよいだろう。

第 2 節 自然

三方の山に囲まれ、鴨川、桂川などの清らかな河川と豊富な地下水に恵まれて「山紫水明の地」と謳われる京都には、数多くの自然景勝地があり、そして名所として『都名所図会』に収録されている。内容によってこれらの図絵は山岳と水系の二種類に分けられるが、この二つの描写のどれもがよく背景あるいは環境的要素となって寺社、集落、施設などほかの内容類別の図絵にも現れるため、以下では自然的景観を主題とした作品に対して分析を進める。

山岳名所を描いた図絵の代表例としては巻四の「愛宕山」（図 3）が挙げられる。同じく京都の名山が描かれた「比叡山延暦寺」（巻三）や「高雄山神護寺」（巻六）などの寺社をテーマとした作品と比較して、「愛宕山」図絵においては寺社に当たる部分の頂上の愛宕神社に対する描写がより小さく簡単になり、山体を遮蔽する霞の表現も少なくなっている。つまりこの作品は寺社ではなく山自体の景観を強調して表象するもの（そのタイトルの記述にも反映されている）だということが示唆された。そしてここで注目すべき点は、背景などのサブ要素としての山にみられる線や点で表示されている山の植生と相対して、主要な表現対象となる山岳における樹木の描写がより具象的かつ確実にされていることである。この種の表現手法の役割については、山の視覚表現を豊かにすることによってその山岳名所としての景観性を画面で表すのと、巻三の「栗田山・日岡峠」にみられる画面前方の山木描写（樹冠と幹が描かれた）と後方の山木描写（点と線のみ）との対比を通して空間の遠近情報を提示することが考えられる。

水に関わる名所は主に池・湖と河川の二つがある。全体的な形状のほかに、それぞれの水面描写も異なっている。例えば、巻四の「大澤池・大覺寺」・「廣澤池・遍照寺旧跡」（図 4）と巻六の「御菩薩池」のような池の絵においては比較的少なく緩やかな線が描かれて、静かな池の平穏さが伝わってきた。それに対してより大きな湖・琵琶湖を描いた巻三の「近江八勝遠景圖」（図 5）では、「く」の字が横転したように見える折線が連続的に使われ、海の波と近似する描写で湖面の広さを表している。そして巻四の「嵐山・法輪寺・渡月橋」（図 6）に描かれた大堰川のような河川の表現としては、多くの長い曲線を用いたことによって川水の流動が表象されている。以上に述べた池・湖と河川のインフォグラフィックス表現以外に、

水の名所をテーマとした図絵作品にはまた二つの表現手法上の特徴がみられる。まず近景での河川図絵（巻二「月見橋・芹根水」、巻五「玉川」および巻六「御手洗川」）においては、川の水で手を洗ったり、川を渡ったりする人々がそれぞれに描かれている。訪ねてきた見学者と水との触れ合いの場面を取り上げることによって、対象河川の名所性を可視化するのには、上記の人物表現の目的であると推測される。次に池・湖もしくは河川を主題とした作品の中には、山岳の描写も常に存在する。また、前者と後者はほぼ1:1の比率で画面を上下に分割したことが確認できた。この視覚表現の傾向から、山と水の一体化した「山川の美観」という作者の自然に対する風景認識が示された。

第3節 行事

主に超遠景と遠景の視点で描かれた寺社図絵に反して、『都名所図会』の行事内容のほとんどは近景（計22点、全体の88%）で表現されている。その理由については、場所の空間構成より、行事の主体である様々な人の服装や動作、表情などに対する近距離からの細かい描写に重きが置かれたことが考えられる。また、描かれた行事の具体的内容は祭礼、年中行事（まつる神仏や先祖が存在する祭りとは区別するため、ここではまつる対象がなく定期的に行われる定例行事を指す）と遊びの三種類がある。

まず宗教的な祭礼が行事図絵の中で最も多く描かれる内容であり、京都寺社の多さに関連していることは既に述べた。代表的な事例としては、巻二の「祇園會」、巻四の「牛祭圖」、巻五の「走馬圖」、巻六の「葵祭之圖」などが挙げられる。それぞれの寺社が主催して、多数の人が参加した大規模な祭事・儀式的全貌を近景視点の構図で描ききれないため、その最も象徴的な場面・内容の一部を切り離して、そこにスポットを当てるのは祭礼のインフォグラフィックス表現の常套手段と言えよう。例えば祇園祭の長刀鉾の山車や太秦牛祭の牛に乗る「摩多羅神」、藤森祭の乗馬武者、葵祭の王朝行列・御所車などの「祭りの見どころ」となるものは衣装・装飾の細部まで描かれ、この行事の一番特徴的かつ魅力的な部分を視覚的に再現して読者（旅行者）に興味を持たせる役割を果たしている。

次に、空也堂の鉢叩き（巻一「柳の水・空也堂茶筌賣」）や鞍馬寺の竹伐り会式（巻六「六月廿日鞍馬の竹伐」）などの年中行事は参加者が比較的に少ないため、その行事風景の全体像をありのままに描写することが可能である。一方で、五山送り火のようないくつもの異なる場所で同時に行われるものに対する表現においては、上述の祭礼図絵と同じ手法で行事内容の最

も代表的な構成要素が視覚情報として抽出、呈示されている。具体的に言うと、知名度の高い如意ヶ嶽の大文字火（巻三「大文字送火」）を送り火行事図絵の表現対象に選んだのと相對して、西賀茂の船形の送り火は単なる集落図絵（巻六「西加茂」）の背景となって画面の左上に小さく描かれている。

最後に、本書凡例の第4項「圖中の間に人物の大畫あり四時の佳觀を賞して遊樂の地を知らせんためなり」¹⁴（部分）に記述されたとおり、人たちの物見遊山や遊興などの遊び行為を近景で表現するインフォグラフィックスの手法は、対象エリアの行楽地としての特性を表示するためである。そこで遊びの主な内容・目的のほか、余興あるいは付属的な活動のようなものもしばしば描かれている。例えばいけす料理を楽しむときの「曲水の宴」に倣った遊戯（巻一「生洲」、図7）、花見のときに和歌を短冊に書いて桜の枝にかけ風雅な遊び（巻三「花見圖」、図8）など、様々な遊樂に興を添えるための行動の視覚表現から、当時の社会における人々の各種の娯樂活動の具体的な様相に関する情報が示された。

超遠景と遠景視点の行事図絵については、巻二の「四條河原夕涼之躰」・「七条河原松明殿・四月上卯日稻荷御祭禮」と巻四の「松尾祭礼」の3点がある。前述した祭礼の近景視点でのインフォグラフィックス表現と異なっており、稻荷祭と松尾祭が高い上空から俯瞰的に描かれるのは、それぞれの行列が経由する特定の場所（稻荷祭の神幸を迎えて焚いた大たいまつとその松明殿稻荷神社のある七条大橋兩岸、松尾祭の神輿を船に乗せる「船渡御」が行われる桂川）を強調するためであると推測される。そして、数多くの床几、見世物小屋、芝居などがみられる四條河原での夕涼みの場面においては、個別の納涼行為の様子より、四條河原・四條通り一帯の大規模な盛り場としての性格と大勢の人々で賑わった行事自体の活気が場所全体を捉えた図絵によって可視化されている。

第4節 産業

『都名所図会』に描かれる人の生業は資源・原料を獲得する一次産業から、材料を加工してものを生産する二次産業、旅客や貨物を運送する三次産業にまで幅広くわたっていて、そしてすべて近景の構図によって描写されている。行事図絵でよく用いられる表現手法と同じく、人々がそれぞれの仕事をするときのはたらきを表象するには、その身近なところに視点を置くのが最も適切であると考えられる。

具体的なインフォグラフィックス表現については、京都の名産品・名物をつくる手工業（二次産業）を主題とした作品（巻一「錦織躰」、

巻三「大佛餅屋圖」・「洛東陶工圖」等）の特徴として、品物自体のほかにその製造風景も基本的に描かれている。職人が自らの技術と道具で手作業を丹念に行う場面を描写することによって、「京の伝統工芸」という地域が誇る産業ブランドのイメージを伝えるのはこの視覚表現の目的だと思われる。ただし、巻三の「稲荷土師圖」（図 9）は一つの例外となっている。絵の中には加工・製造の過程ではなく、「布袋」や「稲荷のおキツネさん」などいろいろな伏見人形が道端で販売されている様子が描かれて、商品と伏見稲荷大社の初午大祭とのつながり（初午の日には稲荷詣の土産として布袋の土人形を求めて神棚にまつる風習があった¹⁵⁾）が視覚的に表象されている。

農業、採石業、運送業などの一次・三次産業を表現した図絵作品においては、それぞれの仕事場でみられる特色のある物事を描写する傾向が確認された。例を挙げれば北白川の白川女（巻三「北白川」）、薪を頭に載せて運ぶ八瀬の里人による「頭上運搬」（巻三「八瀬里」）、霜よけのために棚を建てて葦や藁の覆いをかける宇治茶の「覆下栽培」（巻五「茶摘圖」）等がある。もともと日常的な労働風景を見物する価値のある「名所」として成り立たせるこれらの特徴的な要素の情報を提示し、表現対象とされた産業・生業の見どころとそこに含まれた景観性を表すのはこの種のインフォグラフィックスの目的であろう。

第5節 集落

人が集まる市街や村落のような一定範囲の区域を表現する集落の図絵はすべて超遠景と遠景の視点で描かれている。そして、表現対象となる場所・空間の面積が大きいため、最も広い視野を持つ超遠景視点の構図（計 16 点、全体の約 76%）が比較的に多く用いられることは認められた。

寺社図絵と類似していて、場所の空間構成を視覚的に把握させることはこれらの集落図絵に与えられた主要な役割だが、その対象範囲が単体の寺社の境内から特定された区域・エリアの全体に広げられた。ゆえに図絵の画面においては、より多くの寺社、古跡、名木（水）などの名所・名物が同時に描かれて、「人の里」のイメージに合わせるための民家や畑の描写も増えてきた（代表する図絵は巻四の「久世里・藏王堂・琴弾橋・板井清水」がある）。しかし、構図の視点が高くなったのに伴い、それぞれ個別の視覚表現は簡略化（その中には簡単な屋根の描写だけで表示されたものが多数ある）になり、また空間に存在する名所以外のものを霞や雲で遮蔽する余白の使いも多くみられるようになっている。つまり、広域景観の風景絵図とし

ての鑑賞性より、重要性の低い部分を省略して対象区域に点在する各種の名所・名物とその位置関係の情報を提示する地図としての実用性こそは、この集落図絵におけるインフォグラフィックス表現で求められるものであると考えられる。

上述した区域・エリアの通常的な表現手法と異なって、山の麓にある村里のような集落（巻三「一乗寺村・北山御坊・詩仙堂・八大天王」、巻六「松ヶ崎」等）については、霞や雲で省略される部分が少なくなったり、山岳の描写が比較的に細くなったりする描き方が主に用いられている。両者の視覚表現の傾向の差異から、自然の山と人の村落によって構成される「山村」の景観認識は示された。言い換えればこの場合のインフォグラフィックス表現では、各個別の名所・名物の所在が提示されるほかに、山村全体の一つの統合した広域景観としてのイメージとその風景の美が表象されている。

第6節 歴史

『都名所図会』に収録された歴史的由緒のある古跡の表現については、対象物の現状（本書が編纂された当時の）をありのままに描き出すのが一般的な手法であると指摘できる。また、その全貌を画面に収めるために、図絵の視点の高さも古跡空間の広さによって変えられている。例えば面積の小さいもの（巻二「夕顔塚」・「佐女牛の井戸」、巻三「継信忠信塔」等）が近景で素材の材質感まで細かく描写されているのに対して、面積の大きいもの（巻四の「厭離菴・定家卿古跡」と「西寺古跡」）は遠景で俯瞰的に描かれている。それぞれの名所となった旧跡の由来・経緯を記した本文あるいは解説の内容と合わせて、その実際のありさまを図画で視覚的に表象して、対象の過去と現在を読者に直観的かつ全面的に認識させることは、この種の古跡図絵で用いられるインフォグラフィックス表現の目的だと考えられる。ほかに、巻六の「鏡石」（図 10）に描かれる人の姿を映し出せる奇石のような一定の用途・使い道のある古物の表現としては、人とそのものとのインターアクション場面（ここでは鏡石の前にいる女性の上半身が石面に映った様子が描かれた）が描写されて対象物の具体的なはたらきが可視化されている。

古跡図絵のほとんどは上記の手法で表現されたが、ただ一つの特例もある。それは巻四の「業平母公塔」（図 11）である。作品が近景の視点で描かれながら、古跡自体（歌人・在原業平と父母の五輪石塔）の描写は超遠景や遠景の視点で描かれたように極めて小さくなっていて、画面左上の竹藪に隠れている。一方で、絵の大半を占める付近の田舎に住む一家の生活場

面と業平母公塔を探そうとする旅姿の二人組の表現には重きが置かれた。この絵画主題と実際に描かれた内容の格差から、表現対象とされる古跡の描写を小さく目立たないようにすると、訪問先への道を尋ねる人の描写を付け加えることを通して、辺鄙なところに位置する古跡へのアクセスの悪さを視覚的に表示するインフォグラフィックスの意図が読み取れる。

物としての古跡以外に、事柄として昔から伝わる伝承を描いた故事図絵は、巻一の「和泉式部と一遍上人の問答（本書目録と画面では作品タイトルが記されなかったために上記の仮名をつける）」（図 12）がある。絵には霊夢を得て誓願寺で「決定往生六十万人」の札を配っている一遍上人のもとに、一人の女性の姿で現れた和泉式部の霊が人の往生について上人に問おうとする謡曲『誓願寺』の中のワンシーンが描かれている¹⁶。誓願寺とゆかりの深い和泉式部と一遍上人が主人公となって、当寺の舞台で往生の条件と方法をめぐって問答するこの物語の絵画表現は、「女人往生の寺」という寺院の性格を強調して表している。また、寺社に関連する文芸作品の場を画面で表象する点においては、『京童』挿絵の視覚表現から受けた影響もみられる。

第7節 施設

住居、橋梁、交通結節点、庭園などいろいろな施設は景観性のある名所として『都名所図会』に取り上げられた。施設規模の大きさにしたがって、その図絵視点の高さは変化され、超遠景・遠景の5枚と近景の4枚に分けられて比較的に平均化されている。そして、御所の絵（巻一「内裏之圖」）に束帯姿の公卿を描いたり、舟の発着場の絵（巻五「伏見船場」）に上陸して駕籠に乗り換える旅人を描いたりするように、各種施設のイメージに合う人物像の描写を加えることで、対象のもつ特性あるいは機能をより明確に示すインフォグラフィックスの手法もしばしば確認された。

施設図絵の具体的内容については、まず橋を主題とした作品の数（4点）が最も多くて全体（9点）のほぼ半数を占めている。その絵画表現も大別して二つのパターンがある。一つは巻一の「三條大橋」（図 13）と巻二の「五條橋」にみられる橋梁自体が主要な表現対象となるケースである。この場合では、橋の描写が欄干柱頭の擬宝珠まで細かくされているが、それも画面の一部（約3、4割）しか占めていなかった。絵の中の鴨川右岸（京都の中心部側）の町並みが橋と同じあるいはそれ以上の比重で描かれたのを含めて考えれば、橋梁とその京都側の市街風景を「都の玄関」という景観イメージに一体化して視覚的に提示するのは、ここで用いられ

るインフォグラフィックス表現の目的であることがわかる。そしてもう一つのパターンとしては、巻一の「一條戻橋」と巻五の「伏見指月・豊後橋・大池」から示された橋の表現に重きが置かれなかったケースがある。局部だけが描かれる（一條戻橋）のと、描写が簡略化された（豊後橋）ように、この場合においては橋が作品のテーマとされたが、実際には名所の所在位置を表示するためのシンボルのような画面の構成要素の一つとなっている。堀川の流れや伏見月橋院からの月見風景など、橋梁周辺の観賞性のある景観こそは絵画表現の主要対象であると思われる。

庭園図絵の事例には、東本願寺の別邸・涉成園を描いた巻二の「東殿」（図 14）がある。その視覚表現については、扉、窓、手すりなどが省略されて、数少ない線で構成される極めて簡単な建築描写に対して、各種の樹木、庭石、水生植物が比較的細かく描かれている。人工的な建造物ではなく木や石の自然的要素の表現に重きを置いたことによって、自然の山水を模した池泉庭園の特性と風景美が強調された。また、高い上空に設定された俯瞰的な視点から、庭園全体の配置を把握するのも可能である。同じインフォグラフィックスの手法は、寺社図絵でありながら寺院建築ではなく境内の庭園を主な表現対象とした巻三の「銀閣寺」と巻六の「金閣寺」にもみられる。

本節の冒頭で述べたように、施設の全貌を絵の中に収めるため、ほとんどの図絵視点の高さは対象の規模に合わせて変えられるが、一つの例外として巻二の「嶋原」が挙げられる。この絵には遊廓・島原の出入り口（大門）と、三味線を弾く妓や飲食をする客、抱きかかえられて帰る人など様々な遊びに興じる人の姿が近景の視点で描かれている。一般の町家とあまり変わらなかった建物自体および場所全体の空間構成より、いろいろな娯楽を楽しむ人々で賑わった門前付近の場面に焦点を当てたのは、島原の歓楽街としての性格をわかりやすく可視化するためのインフォグラフィックス表現であると考えられる。

第3章 地域アイデンティティの視覚伝達

第1節 図絵にみる地域的特色の表象

ここまでは、『都名所図会』に掲載された各種図絵のインフォグラフィックス表現を内容別で分析した。前述したとおり、本書は京都の名所旧跡や事柄を読者（旅行者）に紹介する名所案内記いわゆる観光ガイドブックであるため、人々に興味や関心を持たせる対象地区の魅力を提示する作品表現が求められる。その魅力を構成する重要な要素として、ほかのところとの区

別をつけた地域の独自性・特性は地理環境や歴史伝承、風俗習慣、生産活動などいろいろな方面に表象されている。以下では、本書図絵に反映された京都の地域的特色について検討する。

地域環境は地形や動物・植物の生態によって形成される自然環境と、都市や村落のような人間が社会生活を営む人工環境の二つに大別される。まず自然環境を直接的に表象したのは、山岳や河川をテーマとした自然内容の図絵である。これらの作品を通して直観的に認識できる京都の地理的特徴は、ほかの各種内容の図絵でしばしば描かれた交通事情の表現にも確認される。三条大橋を渡って都を出発する大名の行列（巻一「三條大橋」）や多くの人と牛馬が往来する主要幹線道路の伏見街道（巻三「蓮華王院三十三間堂・大佛殿」）と大津街道（巻三「栗田口・御猿堂・午頭天皇・佛光寺廟所・親鸞聖人植髪尊像」）、山を越える人たちの姿が描かれた山中の往還道の姥ヶ懐（巻三「栗田山・日岡峠」）と藩谷越（巻三「花山・山科」）、伏見港を拠点とした京都と大坂を結ぶ淀川の舟運（巻五「伏見船場」）など、京都を出入りする様々な異なる交通手段の視覚表現から、三方の山に囲まれて、東面の東海道と開いた南面の伏見街道・大坂街道の陸路を主要な通行ルートとする内陸盆地という京都の自然地形を概観することはできる。一方で、巻によって分けられた各エリア（例えば巻一と巻二の対象範囲は中心部の市街地であり、巻三の対象範囲は山科から大原までの東部地区であるなど¹⁷⁾）にある名所・名物の図絵にみられる背景描写の差異（民家もしくは山岳、林地等）と、集落図絵の主題としてよく取り上げられた各村落の表象には、賀茂川・鴨川と桂川に囲まれた中心地区とその東南の一部に集中して、周辺の山地に位置する複数の山村・人里に分散する京都の人口分布のような人工的環境の要素も視覚的に反映された。

具体的な形のない地域過去の歴史と古くから伝わる伝承のほとんどは、事件・事柄自体の場面ではなく、残された遺跡などで間接的に表象された。これを主な表現対象としたのは各種の歴史図絵だが、ほかの内容種類の図絵にも昔の人や出来事に関わる古跡の描写が散見される。その中で数が最も多かったのは、歴史人物の墓・塚や供養塔である。例を挙げれば藤原定家の墓（巻一「相國寺」）、織田信長の墳（巻一「本能寺」）、源經基の神廟（巻二「遍照心院」）、建礼門院（平徳子）の墓（巻三「大原寂光院」）、嵯峨天皇の供養塔（巻四「清凉寺」）など枚挙にいとまはない。また、鴨長明の方丈庵跡・方丈石（巻五「日野薬師」）や大徳寺に移築された聚楽第の遺構・日暮らし門

（巻六「大徳寺」）のような著名な建物の旧跡もいくつかみられる。いろいろな図絵で描かれた平安時代から江戸時代前期までの各時代の史跡が多く存在することは、多数の歴史人物が活躍し、そして数多の歴史的事件が起こった場所となった京都の千年の古都としての性格を表している。

文化は、人間が自然・風土との関わりから習得した立ち居振る舞いや衣食住をはじめとした暮らし、生活様式など、人と人の生活に関わることの総体と捉えられる¹⁸⁾。ゆえに一つの地域の文化を直観的に体現するのは、その土地の人々によって行われる様々な生活や行事の風俗習慣だと思われる。そこで各種の行事図絵の描写された内容から、京都の持つ二つの文化的特徴は可視化された。一つは上品で雅やかな趣のある「風雅」である。巻四の「嵐山・法輪寺・渡月橋」の扇流しや巻六の「葵祭之圖」の王朝行列・路頭の儀のような昔の貴族生活を偲ばせる伝統行事には、古都ならではの優雅な風情を感じられる。また、和歌を詠んで盃を巡らす「曲水の宴」に因んだ遊興（巻一「生洲」）や歌の書かれた短冊を桜の枝に結ぶ花見の風習（巻三「花見圖」）の詩歌・文章の遊びにも、文芸のたしなみを重視する「雅」の文化が発達することが反映された。そしてもう一つは、人目を驚かす独特かつ華美な趣向を凝らした「風流」である。奇祭と呼ばれる風変わりな太秦の牛祭（巻四「牛祭圖」）と今宮のやすらい祭（巻六「紫野今宮三月十日やすらひ祭」）や、派手な装飾の美を極めた祇園祭の山鉾（巻二「祇園會」）の視覚表現から、気高く落ち着いたイメージの「風雅」の文化と少し異なって、より華やかで活発的な性格を持つ地域文化の側面は表象された。

人の生産活動の成立がその所在する土地の地形や気候、地理的位置、資源など数多くの要素に深く関与するため、それぞれの地域には独自の産業構造が形成されている。様々な産業図絵の主題とされ、また他種図絵の内容を構成するサブ要素として描かれた京都の産業については、一次から三次産業にまで全面的に行われていたが、表現された対象数の対比から見れば最も代表的なのは染織業（巻一「錦織躰」、巻二「菅大臣社」）や製陶業（巻三「稻荷土師圖」・「洛東陶工圖」）のような手工業であると考えられる。運送業が発達する交通の要衝ではなく、大量の物資や資源が集まる「都」としての京都においては、古くから皇族や貴族の生活を支えるために高品質な製品を生産し続ける商品・工芸品の提供元という産業の性格が強く表出された。

第2節 作者の伝えたい京都イメージ

『都名所図会』の内容となる各名所・名物とその図絵は編纂者の秋里籬島と絵師の竹原春朝斎によって意図的に選定されて描かれたものである。ゆえに作者が本書の構成と表現を通して読み手にアピールしたい京都の地域イメージは存在すると推察される。これからは、前節で検討した様々な地域特性をまとめて、京都の町としての全体像を考察する。

まず、寺社図絵が本書の中で最も多く掲載された内容だということは、この地に多数の寺院や神社などの宗教的施設があるのを意味している。つまり、京都は各宗派の本山寺院や総本社・総本宮のような旧社格の高い神社をたくさん持つ宗教都市としてみられることができる。寺社風景の美しさを図画で伝える趣旨も、本書凡例の第1項「神社の芳境 佛閣の佳侶 山川の美観等 今時の風景をありのままに摸寫し」¹⁹（部分）に記されたとおりである。一方で、『京童』の挿絵によく用いられた寺社をある物語・出来事の舞台のように描写する視覚表現と違い、俯瞰的な視点で境内全域を捉えた『都名所図会』の寺社図絵では、常に多くの参拝者の姿が確認される。信仰の旅で訪ねてきた巡礼者たちの人物描写は、各寺社に宗教的聖地のほかに観光スポットとしての性格を与え、さらに多数の観光名所を有する観光都市という京都イメージの表象につながっていると思われる。

次に、京都の文化的特徴である「風雅」と「風流」が様々な風俗習慣に反映されるのは既に前節で述べられたが、ことに詩歌や文章などの文芸的趣向を追求する「雅」の文化については、各種の行事図絵で描写された事柄だけではなく他種類の図絵作品にもいろいろな文化人（例えば藤原定家や和泉式部、在原業平、西行法師、鴨長明等）ゆかりの名所旧跡が多く描かれて、地域と典雅・高雅のイメージとのつながりが強化されて示された。また、上品で雅やかな生活のたしなみと華やかな意匠を凝らした美意識は貴族社会を中心とした王朝文化から継承されたものであることから、歴史的由緒のある古都・京都の伝統文化が高度に発達した文化都市としてのイメージが表された。

最後に、ものを加工・製造する二次産業が盛んになった京都においては、方広寺の大仏殿を名称に取り入れた大仏餅、伏見の稲荷山の埴土で作られていた伏見人形、西陣の町で生産された西陣織など、ブランド化された製品とその技法・工芸が多くある（二次産業以外に宇治茶や白川石のようなブランド化された一次産業の生産物もある）。これらの「京ブランド」の成立、維持と成長を支えるのは、商品自体のハイクオリティだけではなく、前述した京都の持つ

長い歴史と伝統（例えば古くから受け継がれてきた技術や商品と伝統行事との関わりなど）もブランドに付加的価値を与えてその競争力と知名度を高めたと考えられる。そして地域が誇る様々な「京ブランド」によって構築された京都が手工業を中心とした伝統産業都市であるイメージは、職人たちの制作風景などを詳しく描写した産業図絵で視覚的に伝達された。

おわりに

本稿では、情報をわかりやすく視覚的に伝えるものというインフォグラフィックスの定義に基づいて、京都の名所旧跡などを紹介する江戸時代中期の名所案内記・『都名所図会』に掲載された各種の図絵作品をインフォグラフィックスとして捉え、その内容を寺社・自然・行事・産業・集落・歴史・施設の七つに分類してから、それぞれの視覚表現の特徴と役割に対して分析研究を行った。結果については、各名所・名物の全体像や「見どころ」を客観的に描写し、また説明性に重きを置いた図絵が大量に用いられることによって、本書の観光ガイドブックとしての実用性およびインフォグラフィックスとしての有効性が認められた。ほかには、本書図絵で表象された様々な地域的特色に基づいた京都の宗教・観光・文化・伝統産業の四つの都市イメージも考察された。

『都名所図会』をはじめとして、江戸時代中期から後期にかけて日本各地（当時の律令制諸国）をテーマとした名所図会は次々に刊行された。対象地域や作者（編纂者と絵師）が異なるため、各名所図会の内容構成と視覚表現にも相当な差異があると思われる。そこで本研究で分析、整理した成果をベースにして、他地域の名所図会との対比を通して、名所図会が地域特性を可視化して表象するインフォグラフィックスであるという観点の普遍性と確実性の論証を深めるのは今後の課題としたい。（16554字）

注

- 1 朴晋燭「江戸時代の上層農民の余暇と旅行」『国文学研究資料館紀要』10 号田中俊光訳、国文学研究資料館、2014 年 3 月、p. 167。
- 2 金子晃之「近世後期における江戸行楽地の地域的特色－『江戸名所図会』からみた行動文化－」『歴史地理学』175 号、歴史地理学会、1995 年 9 月、p. 21。
- 3 長谷川奨悟「『都名所図会』にみる 18 世紀京都の名所空間とその表象」『人文地理』62 巻 4 号、人文地理学会、2010 年、p. 60。
- 4 岩松文代「『都名所図会』にみる京都近郊山村の名所性－近世京都から伝えられた山村観－」『日本林學會誌』85 巻 2 号、日本林學會、2003 年 5 月、p. 115。
- 5 長谷川奨悟「『京童』にみる中川喜雲の名所観」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』16 号、佛教大学宗教文化ミュージアム、2020 年 3 月、p. 20。
- 6 山近博義「『都名所図会』の構成と本文にみられる諸特徴」『地理學報』36 号、大阪教育大学地理学教室、2005 年 3 月、pp. 27-31。
- 7 古田雅憲「『京童』挿絵小考（その一）－巻一「誓願寺」と「和泉式部」－」『文教國文學』43 号、広島文教女子大学国文学会、2000 年 9 月、pp. 1-2。
- 8 櫻田潤『たのしいインフォグラフィック入門』ビー・エヌ・エヌ新社、2013 年、p. 11。
- 9 長谷川前掲論文（3） pp. 63-65。
- 10 長谷川前掲論文（3） p. 66。
- 11『新修京都叢書（第十一巻都名所図会）』光彩社、1968 年、p. 54。
- 12 宗政五十緒『都名所図会を読む』東京堂出版、1997 年、p. 79。
- 13『新修京都叢書（第十一巻都名所図会）』光彩社、1968 年、p. 10。
- 14『新修京都叢書（第十一巻都名所図会）』光彩社、1968 年、p. 10。
- 15 宗政五十緒前掲書 pp. 214-215。
- 16 総本山誓願寺 HP <https://www.fukakusa.or.jp/p015.html>（2023 年 7 月 4 日閲覧）
- 17 山近博義前掲論文（6） p. 26。
- 18 文化庁 HP https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_2/shakaikochiku_toshin/（2023 年 7 月 10 日閲覧）
- 19『新修京都叢書（第十一巻都名所図会）』光彩社、1968 年、p. 10。

参考文献

書籍

- 1『新修京都叢書（第十一巻都名所図会）』光彩社、1968 年。
- 2 宗政五十緒『都名所図会を読む』東京堂出版、1997 年。

- 3 本渡章『京都名所むかし案内－絵とき「都名所図会」』創元社、2008 年。
- 4 櫻田潤『たのしいインフォグラフィック入門』ビー・エヌ・エヌ新社、2013 年。

論文

- 1 金子晃之「近世後期における江戸行楽地の地域的特色－『江戸名所図会』からみた行動文化－」『歴史地理学』175 号、歴史地理学会、1995 年 9 月、p. 21。
- 2 古田雅憲「『京童』挿絵小考（その一）－巻一「誓願寺」と「和泉式部」－」『文教國文學』43 号、広島文教女子大学国文学会、2000 年 9 月、pp. 1-2。
- 3 岩松文代「『都名所図会』にみる京都近郊山村の名所性－近世京都から伝えられた山村観－」『日本林學會誌』85 巻 2 号、日本林學會、2003 年 5 月、p. 115。
- 4 山近博義「『都名所図会』の構成と本文にみられる諸特徴」『地理學報』36 号、大阪教育大学地理学教室、2005 年 3 月、pp. 27-31。
- 5 長谷川奨悟「『都名所図会』にみる 18 世紀京都の名所空間とその表象」『人文地理』62 巻 4 号、人文地理学会、2010 年、p. 60。
- 6 朴晋燭「江戸時代の上層農民の余暇と旅行」『国文学研究資料館紀要』10 号田中俊光訳、国文学研究資料館、2014 年 3 月、p. 167。
- 7 長谷川奨悟「『京童』にみる中川喜雲の名所観」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』16 号、佛教大学宗教文化ミュージアム、2020 年 3 月、p. 20。

インターネット

- 1 総本山誓願寺 HP <https://www.fukakusa.or.jp/p015.html>（2023 年 7 月 4 日閲覧）
- 2 文化庁 HP https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_2/shakaikochiku_toshin/（2023 年 7 月 10 日閲覧）

図版

『都名所図会』掲載図絵の分類

視点\内容	寺社	自然	行事	産業	集落	歴史	施設	総計
超遠景	24	8	2		16		1	51
遠景	119	2	1		5	2	4	133
近景	3	4	22	9		6	4	48
総計	146	14	25	9	21	8	9	232

(表 1) 『都名所図会』掲載図絵の分類
(筆者作成)



(図 1) 鞍馬寺 (部分)
都名所図会 [6-16] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555348/1/16>) より筆者作成



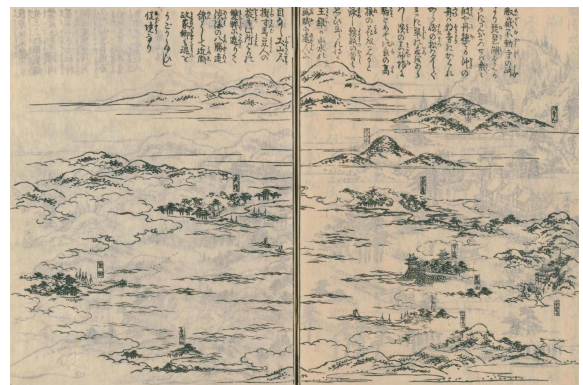
(図 2) 御所八幡社 (部分)
都名所図会 [1-34] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555343/1/34>) より筆者作成



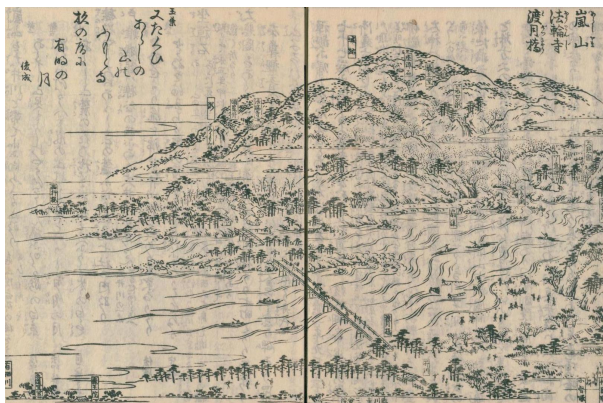
(図 3) 愛宕山 (部分)
都名所図会 [4-5] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555346/1/5>) より筆者作成



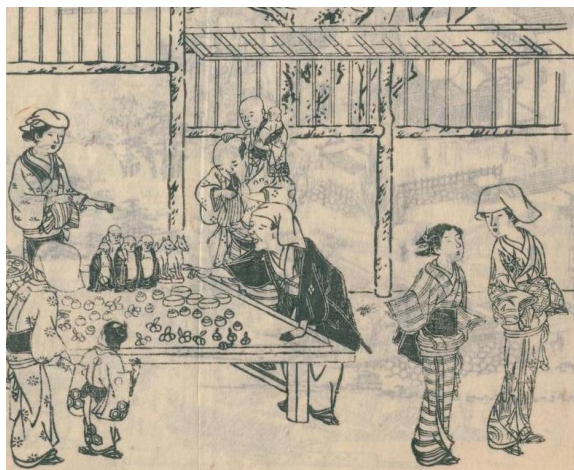
(図 4) 廣澤池・遍照寺旧跡 (部分)
都名所図会 [4-17] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555346/1/17>) より筆者作成



(図 5) 近江八勝遠景圖 (部分)
都名所図会 [3-82] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555345/1/82>) より筆者作成



(図6) 嵐山・法輪寺・渡月橋(部分)
都名所図会 [4-25] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555346/1/25>) より筆者作成



(図9) 稻荷土師圖(部分)
都名所図会 [3-4] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555345/1/4>) より筆者作成



(図7) 生洲(部分)
都名所図会 [1-30] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555343/1/30>) より筆者作成



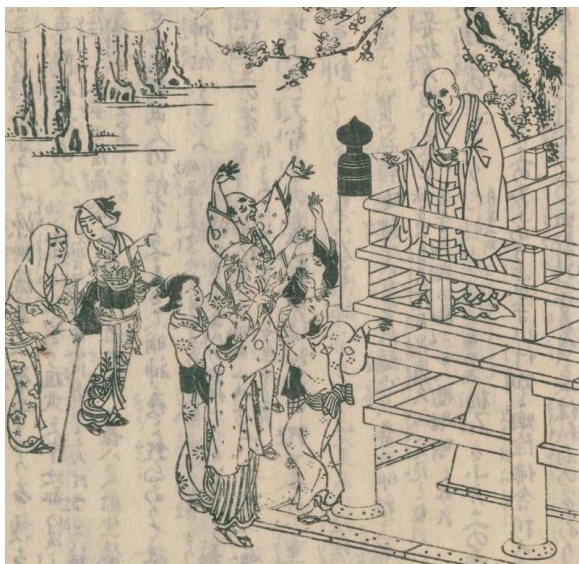
(図10) 鏡石(部分)
都名所図会 [6-38] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555348/1/38>) より筆者作成



(図8) 花見圖(部分)
都名所図会 [3-36] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555345/1/36>) より筆者作成



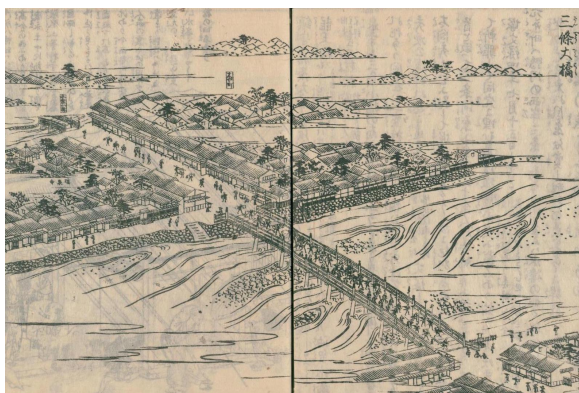
(図11) 業平母公塔(部分)
都名所図会 [4-49] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555346/1/49>) より筆者作成



(図 12) 和泉式部と一遍上人の問答(部分)
都名所図会 [1-40] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555343/1/40>) より筆者作成



(図 14) 東殿(部分)
都名所図会 [2-43] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555344/1/43>) より筆者作成



(図 13) 三條大橋(部分)
都名所図会 [1-33] (国立国会図書館) (<https://dl.ndl.go.jp/pid/2555343/1/33>) より筆者作成

An Investigation of infographics about Cultural Representation in “Miyako Meisho Zue”

HU Boning

As a type of "Meisho an'nai-ki" (today's tourist guidebooks) in Japan's modern history, "Meisho Zue" differs from "Meisho-ki" (other local history and geography books) by including not only textual descriptions of local attractions and scenery but also extensive illustrations that objectively depict their appearance and origins. Unlike landscape or folk paintings that emphasize artistic or aesthetic value, these illustrations focus on the image's explanatory function to help viewers grasp relevant information about the depicted objects (such as the overall appearance of temples and shrines, architectural styles, or scenes of various activities). Based on the definition of "information visualization" that conveys information in a more visually accessible form, the illustrations included in "Miyako Meisho Zue" can be seen as a type of visual representation and expression of regional characteristics and charm through information visualization. Therefore, this study will focus on the early edition of "Miyako Meisho Zue", known as "Miyako Meisho Zue", using the perspective of information visualization research to analyze the illustrations contained in the book series.

The specific research methods are as follows: Firstly, according to the content of the depicted objects, the illustrations in this book are divided into seven categories: temples and shrines, nature, behavior and activities, industry, settlements, history, and facilities. Each category is then examined and analyzed for its painting performance (such as the use of different heights for distant and near perspectives, visual elements arrangement, and overall proportion arrangement). On this basis, the regional characteristics reflected in the illustration performances are sorted out, and the author's intention to convey the city image of Kyoto is explored to demonstrate the effectiveness of "Miyako Meisho Zue" as a visual representation and expression of regional characteristics through information visualization.